

## クィア理論の制度化・規範化を考える

### —David Halperin “The Normalization of Queer Theory”—

島袋海理

#### はじめに

本稿は, "The Normalization of Queer Theory." Halperin, David M (以下, ハルプリン論文)を紹介するとともに, クィア理論の制度化や規範化について考察することを目的とする。

筆者は普段, 同性愛者のアイデンティティ形成について研究しているが, このテーマと関連してクィア理論やクィア・スタディーズにも日頃から関心を抱いており, ハルプリン論文を読むに至った。ハルプリン論文は, *Queer Theory and Communication: From Disciplining Queers to Queering the Discipline(s)* (Gust A. Yep, Karen E. Lovaas, and John P. Elia ed. Harrington Park Press Inc, 2003, pp. 339-343) に掲載された論文で, クィア理論やゲイ解放運動, クィア・パフォーマンス, クィア・ペダゴジーなどの諸研究を牽引してきた研究者たちが, それぞれのテーマについて振り返った論文の1つである<sup>1</sup>。著者のデイビット・M・ハルプリンは, 同性愛の社会史やミシェル・フーコー論, ゲイ・アイデンティティなどを専門とする研究者で, 『聖フーコー』や『同性愛の百年間』など邦訳された著作も多い。ハルプリン論文はわずか5ページと短い, クィア理論をめぐるべき重要な諸問題を提起している論文であると筆者が認識したため, 本稿において紹介することになった。

以下, 本稿の構成について述べる。第1章ではハルプリン論文について概説し, ハルプリンの主張を整理する。第2章では, 日本のアカデミズムにおけるクィア理論の現状についてどのようなことを考えるべきか, ハルプリン論文の示唆を踏まえて論じる。

#### 1. 本文の概要

本章では, ハルプリン論文について簡単に説明し, クィア理論の規範化に対するハルプリンの主張を整理する。本文には章や節などが無い, 筆者が便宜的に3つのパートに分け, それぞれのパートごとの内容とハルプリンの主張を検討していく。なお, ハルプリン論文からの引用はすべてページ数のみを示し, 引用箇所は筆者が訳した。また, 引用文中における〔〕内は筆者による注記である。

##### (1) クィア理論の起源(p. 339-340 3段落目)

それまで同性愛者に対する蔑称として用いられ, 「奇妙な」あるいは「風変わりな」といった意味を有していた語であるクィアは, 「今やその語を説明することに書物全体が費やされるほどにたいへん複雑で深遠な可能性をほのめかすようになる。」(p. 339) 本文の冒頭において著者は, こ

うした状況がどのように起こったのかについて、その道筋を振り返りながらいくつかの点を検討すると宣言する。

「クィア理論」という表現が初めて使われたのは、1990年2月にカリフォルニア大学で行われた会議の見出しとして、同大学に在籍するテレサ・デ・ローレティスがつけた時である<sup>2</sup>。デ・ローレティスがクィアと理論という2つの言葉を合わせることに反対する同僚もいたが、「その〔クィアと理論の〕結合は単なる悪ふざけなどではなく、意図的に混乱をもたらそうとするものだった」(p. 340)という。会議の冒頭でデ・ローレティスは、クィア理論という語を創設した意図として、近年台頭してきたレズビアン&ゲイ・スタディーズに揺さぶりをかけることや、経験社会学者が同性愛研究において大きな影響力を持っていたことに異議を唱えることなどを挙げ、それ以上に、以下のような強い意図を持っていたことを宣言した。

それ以上に、彼女は理論をクィアにすること to make theory queer (すなわち、学界において伝統的に「理論」として通っている異性愛的土台と前提に異議を唱えること)と、理論をクィアすること to queer theory (性的欲望と性的快楽の理論化の試みにおいて、逸脱しようとするすべてのことに関心を呼び寄せること)の両方を期待した。したがってクィア理論は、まだ存在こそしていないが、その完成が切実に望まれる仮説上の知的実践のための代用語であった。(p. 340)

それまで「理論」と名指されたものの前提を批判する営みである「理論をクィアにすること」と、従来の理論化の試みから逸脱するような研究や事例に着目する態度を示す「理論をクィアすること」の2つが、クィア理論という表現が創出された主要な目的であり、その時には「クィア理論」という一つの体系立った理論の構築は意図されていなかった。

## (2) クィア理論の制度化と課題(p. 340 4段落目-p. 342 1段落目)

「しかしながら、スキャンダラスな表現の『クィア理論』という語が発せられたそのとき、それはすでに確立されたひとつの理論学派の名前になった。」(p. 340) デ・ローレティスの「理論」そのものに異議を唱えようという意図とは裏腹に、クィア理論はマルクス主義理論や精神分析理論などと同じように、一つの実在する「理論」と見なされるようになってしまった。「クィア理論〔の文字〕は本屋の棚や学術的な求人広告などに登場し、『レズビアン』と『ゲイ』というこれ以上簡単にできない性的な記述語を幸いにも使わないでおくことを可能にした」(p. 340)とあるように、レズビアン・ゲイの問題に関する研究の理論としてクィア理論は理解され、受容された。

それ〔クィア理論〕はさらに、フェミニズムとゲイ/レズビアンアイデンティティ・ポリティクスに対する同時期の批判とも極めて親和的で、「クィア」は一種の高等でポストモダンなアイデンティティであり、クィア理論はフェミニズムとレズビアン/ゲイ・スタディーズの両方

に取って代わったという見方を助長した。(p. 340)

ここではさらに、レズビアン&ゲイ・スタディーズの諸課題を乗り越えるものとしてクィア理論が評価・受容されていったことが示されている。こうした評価ゆえ、クィア・スタディーズは高等教育機関へ組み入れられ、クィア・スタディーズの職が創出され、「クィアな研究が学問的に然るべき評価を獲得した」(p. 340)。こうしてクィア理論がアカデミズムにおいて評価されたことに、ハルプリンは批判的である。もちろんクィア理論のすべてが悪いわけではなく、クィア理論が生んだ成果はあったと著者は評価しつつも、「レズビアン・スタディーズとゲイ・スタディーズは決してそうはならなかったのに、クィア理論—その反同化主義的姿勢や、異常なもの、周縁的なものを受容する衝撃的な姿勢ゆえに、クィア理論はラディカルな政治学を要求する—が私たちの(概して異性愛的な)知の体制に受容され、正規化され、吸収された素早さには、なにか奇妙なもの、うさんくさいほどの奇妙さがある」(p. 341)と指摘する。

ハルプリンはこう指摘し、クィア理論のアカデミズムにおける受容のされ方を、3つのステップから比喩的に説明する。第一のステップは、クィア理論において「理論」を「クィア」に比べて強調することで『クィア』が『理論』の無害な限定詞となること」(p. 341)であり、第二のステップはクィアの政治性を薄め、「それによって『クィア』を抽象化し、それを転覆の一般的なバッジ、『リベラル』のトレンドィー・バージョンに変えること」(p. 341)である。最後に、「クィア理論は、領域ではなく理論であるがゆえに、既存の学問領域の独占に対して何の脅威も与えなかった。それどころか反対に、クィア理論は〔既存の学問領域〕それぞれに組み込まれることができ、既存の確立された領域における主題に適用されることのできた。」(p. 342) こうした3つのステップによって、クィア理論は以下で述べるようなものになった。

これら3つの動きの結果、クィア理論は家族の誰もが楽しめるゲームのようなものになった。これは矛盾した状況を生み出した。クィア理論が諸領域により広く拡散することで、クィア理論の何がそれほどクィアであるのかを理解するのが難しくなった。その一方で、〔クィア理論とは〕対照的にレズビアンとゲイ男性のみが関係するかに見えるレズビアン・スタディーズとゲイ・スタディーズは、ますます逆行的で同一主義的で時代遅れのものに見えてしまう。(p. 342)

### (3) クィア理論を教えることの困難と課題(p. 342 段落目-p. 343)

ハルプリンはクィア理論の標準的なサーベイ<sup>3</sup>を過去には喜んで行っていたが、執筆当時はそのような授業を行っておらず、さらに「もしクィア・カルチャーやクィア・スタディーズに関与することを望まない(ストレートの)学生がクィア理論の資格を取り、単に最新の大学院教育を完了するための手段として役立つものであるとすれば、私はそのような授業は教えたくない」(p. 343)と述べる。ここから、「クィア理論の資格認定に関する学生の正当な専門的要求に応えつつ、他方で、この企てがもつ批判的側面、あるいはクィアな側面を保持する方法」(p. 343)の模索が、

クィア理論の研究者にとって重要だと指摘する。

さらにハルプリンは以下のように述べ、クィア理論の政治性と高等教育機関において職を得ることを両立させることの難しさについて指摘している。

フェミニズムやレズビアン／ゲイ・スタディーズを創設し、その後クィア理論を高等教育機関に導入した人たちは、知として認められるものを変えたいという衝動と、大学の組織の中で知が機能する、その機能の仕方を変えようという決意によって何よりも動機づけられていた。[しかし] クィア理論で職を得ようとして大学院に登録する今日の学生たちは—彼らの政治的背景や野心が何であれ—大学を変革することよりも、むしろ大学が現在彼らに提供するものから利益を得ようとする。彼らはまた、クィア理論の領域がすでに形成されているのだから、そこに彼ら自身と彼らの仕事のための場をつくり出そうとするのである。(p. 343)

クィア・スタディーズを行う研究者が既存のアカデミズムから利益を得ようとするということについてハルプリンは、それ自体は決して悪いことではなく、むしろこれまでの研究者たちが求めてきたことであったと述べるが、クィア理論が既存のアカデミズムに取り込まれたことで、以下のような課題が生じるという。

それにもかかわらず、これまで決して存在していなかった批判的省察の可能性を創設するために、学生と一緒に研究するのではなく、まるで他の既成領域と同じように、私たちの権威を用いて学生にクィア理論の訓練をさせるといった、クィア理論に関する教育的関係に対して、私たちはこれまでの環境ゆえにまったく準備できていなかったのである（「[成績評価] B+：あなたはセジウィックを上手に使いました、しかしマイケル・ムーンについて言及することを忘れましたね」[としてよいのだろうか]）。(p. 343)

ここでは、権威を用いて「正当な」クィア理論について訓練するというそれ自体クィア的とはいえないような営みが、大学においてクィア理論を教える場面で発生しうることが提示されている。こうしたことはクィア・スタディーズを行い、クィア理論について教えていかなければならない研究者が考えていくべき課題となるのであろう。

全体の結論としてハルプリンは、以下のように主張し、本文を終える。

もしクィア理論が実り豊かな将来をもつことになるのであれば、私たちはそのラディカルな可能性を更新する方法を見つけなければならない。それはクィア理論についてなんらかの新しい、より前衛的な理論的公式を考案しようという意味ではなくて、あからさまに言えば、ぎょっとさせ、驚かし、私たちが考えたことになかったことを考えることを助けるような、クィア理論の潜在的な力を再発明することを意味している。(p. 343)

ここまでのハルプリンの主張をまとめると、1) クィア理論とレズビアン&ゲイ・スタディーズとが切り離されたことで、レズビアン&ゲイ・スタディーズが不当に低く、また誤って評価されてきたこと、2) クィア理論がアカデミズムに受容され制度化されたことで、クィア理論の創設当初の政治性が低減させられたことの2点から、クィア理論が一つの理論と見なされ、アカデミズムで評価されたことの問題を批判している。そしてクィア理論が規範化されたことで、アカデミズムにおいて職を得ることやクィア理論を教えることなどをめぐっていくつかの困難が発生していることが指摘されたのち、こうした問題の打開策として、クィア理論の政治性・ラディカルな可能性を十分に生かせるようなクィア理論のあり方が再発見されることを提案している。

## 2. クィア理論の制度化・規範化を考える

前章まではハルプリン論文について概説し、ハルプリンの主張を整理した。本章ではハルプリンの主張を受けて、日本のアカデミズムへの示唆を考察していく。

日本においてクィア理論は1990年代頃から1つの理論として紹介され、『ジェンダー・トラブル』や『クローゼットの認識論』、『聖フーコー』など、クィア理論にとって重要な著作の多くが翻訳された。2006年にはクィア学会が発足し、日本においてクィア理論に関する議論はさらに活発となる<sup>4</sup>。また、クィア批評やクィア・リーディングを標榜する研究(藤森編 2004; 村山 2005)が盛んになると、クィア・リーディングという営み自体が反クィア的だと喝破する研究(松下 2009)が登場するなど、クィア・スタディーズやクィア理論は日本のアカデミズムにおいて独自の展開を見せている。

こうしたクィア理論をめぐる日本のアカデミズムの現状に鑑みると、ハルプリン論文の主張は日本におけるクィア理論の問題を考えるうえでも有効な示唆を与える。例えばハルプリンの指摘した1つ目の問題点、すなわちクィア理論が近接領域から切り離されて評価されてきた経緯を知ることは、自分の研究でクィア理論を用いる際に、既存のレズビアン&ゲイ・スタディーズ、さらにはフェミニズム・ジェンダー研究とどのような関係を結んでいるのかを振り返る必要性を喚起する。ゲイ・スタディーズやレズビアン・スタディーズ、さらにはジェンダー研究と手を切ることで「純粋な」クィア理論/クィア・スタディーズを追い求めようとするれば、それはハルプリンによって手厳しく批判されるだろう。

また、2010年代後半から日本社会においてLGBTへの社会的関心が急速に高まっているが、このことがクィア理論やクィア・スタディーズへの関心も同時に高めることにつながるかもしれない。実際、近年出版されたクィア・スタディーズの入門書である『LGBTを読みとく』(森山 2017)では、レズビアンやゲイ、トランスジェンダーなどの諸カテゴリーの歴史などの詳細な説明とともに、性の多様性を扱う学問領域としてクィア・スタディーズが解説されている。著者の森山は本文において、クィア・スタディーズが社会運動に多くを負ってきた経緯を紹介し、世の中をよくする営みに批判的な関与を意図する性質をもつことを強調している(森山 2017:

195-196)。

しかし、こうした森山 (2017) の意図に反して、もしクィア・スタディーズが単に「LGBT についての研究」と安直に理解されてしまうと、クィア・スタディーズのもつ可能性が制限されてしまうかもしれない。これはクィア・スタディーズを「レズビアンやゲイに関する研究」を便利に言い換えるために使用するという、ハルプリンが批判的に捉えていたクィア理論の用法である。クィア理論が「LGBT の研究者が使う理論」と安易に理解されないためにも、クィア理論が出てきた経緯やその政治性は常に意識されなければならない。

また、ハルプリン論文の提起した第 2 の問題点、すなわちクィア理論がアカデミズムに統合されたことでその政治性が低減させられてしまったことについては、クィア理論に限定せずとも、何らかのポリティクスを持って誕生した学問のことを考える際に重要ではなかろうか。例えば既存の学問を男性中心的だと批判して誕生した女性学がアカデミズムにおいて制度化され、規範化されてきたことについても、「女性学としてよいのかどうか」をめぐる議論が繰り広げられてきた<sup>5</sup>。クィア理論に限らず、アカデミズムを批判することで成立した学問が制度化・規範化されることについて考察する際にも、ハルプリン論文はその考察の助けとなるだろう。

以上、本稿では、ハルプリン論文について概説し、日本のアカデミズムにおけるクィア理論の現状に対してハルプリン論文から得られる示唆について検討した。本稿を一つのきっかけとしてハルプリン論文がより多くの人に読まれるようになれば、資料紹介の執筆者としてこれ以上に嬉しいことはない。

#### 〔注〕

- 1 なお、ハルプリン論文は学術誌 *Journal of Homosexuality* にも同じページ数で掲載されている (*Journal of Homosexuality* 45(2/3/4), 2003, pp. 339-343)。
- 2 「クィア理論」という語を誕生させたより詳細な意図やねらいについては、デ・ローレティス自身によって説明されている (de Lauretis 1991=1996)。
- 3 ここでいう「クィア理論の標準的なサーベイ」とは、ハルプリン論文では「セジウィックとバトラー、モニック・ウィティッグ、ゲイル・ルービン、ミシェル・フーコー、D. A. ミラー、レオ・ベルサーニ、サイモン・ワトニーに始まり、デ・ローレティスやダイアナ・ファス、ダグラス・クリンプ、リー・エーデルマン、アール・ジャクソン、ビディ・マーティン、スー・エレン・ケース、マイケル・ワーナー、ジュディス・ハルバースタムの業績を通して広がるクィア理論をサーベイする科目」(p. 342) と説明されている。この引用部で挙げられている諸人物は、クィア理論において有名な研究者たちである。
- 4 クィア学会は 2015 年から 2020 年 1 月現在まで、無期限の休止状態にある。
- 5 日本女性学会会報誌『女性学』第 9 号の小特集「女性学の制度化を考える」掲載論文参照。

〔文献〕

- de Lauretis T. 1991, 'Queer Theory: Lesbian and Gay Sexualities; An Introduction.'  
*Differences* 3(2), pp. iii-xviii. (=大脇美智子訳, 1996, 「クィア・セオリー——レズビアン／  
ゲイ・セクシュアリティ イントロダクション」『ユリイカ』28(13), pp. 66-77.)
- 藤森かよこ編, 2004, 『クィア批評』世織書房。
- 松下千雅子, 2009, 『クィア物語論』人文書院。
- 村山敏勝, 2005, 『(見えない) 欲望へ向けて——クィア批評との対話』人文書院。
- 森山至貴, 2017, 『LGBTを読みとく——クィア・スタディーズ入門』筑摩書房。

〔謝辞〕

ハルプリン論文の拙訳に対しコメントをいただいた見崎恵子先生, 拙稿にコメントしてくださった長山智香子先生と古殿真大氏, そして難航した拙稿掲載の可能性を最後まで模索してくださった『教育論叢』編集委員長の二村玲衣氏に, 謹んで感謝申し上げます。